

自分さがしの授業づくり

——教科通信のとりくみを通して——

一 一少女へのメッセージから

今年も浅井秀子さんから年賀状が届きました。大学生活の近況を報らせながら、自分の進路選択がまちがっていなかったことを実感こめて書いてあったのが印象的でした。昨年の年賀状には、先生に四年制大学をつよくすすめられたこと。しかし、自分の意志で「平安女学院短大に行くことにしました。平安女学院は、私にとって神の教え、大好きな学校です。ここまでこれたことを感謝しています」と報告されていましたから、今年は、いわばその続報の気味があったのです。

それを読みながら、強い緊張と不安をまなざしにこめて、にらみつけるようにみていた浅井さんの八年前、中学一年生の幼い表情を昨日のこのように思っていました。

壬 生 博 幸

さて、中学生との新たな出会いを結ぶ「授業びらき」の日は、いつも新鮮な緊張感にあつて、こころもち胸をどきどきさせながら、教室の戸に手をかけます。

子どもたちにすれば、その緊張感は、もっと大きいものがあるはずです。とくに小学校から中学校へ変わると、授業のたびごとに担当する先生もちがいます。そのうえ、私立中学の場合、地域とはなれて、席を並べていた友ともわかれ、多くの場合、ひとりで行ってくるわけですから、どんな友だち、どんな先生とめぐりあえるのか、期待以上の不安が交錯するのはあたりまえだといえます。

かててくわえて、この時は、こちらの方にも、例年とちがいで、いささか緊張の度を増す不安要素が加わっていました。それが浅井さんでした。彼女の耳が、両方ともほとんどきこえない状態であることを私たちは、彼女の合格が決定したあとで知ることになったから

です。

浅井さんは、生後四ヶ月の時、風邪をこじらせた高熱のため聴力を失ってしまいました。彼女の難聴の度合はきつく、浅井さんの表現をかりれば「耳からかすかな音が、ボンボンとはいるだけで言葉はきこえない状態」だといいます。補聴器はつけているものの、実際は唇の動きで言葉をよみとる口話法にもっぱら頼っていました。

それまで授業に行ったり、彼女と接した先生方から、大まかな様子はきいてはいましたが、それでも不安でした。うまくよみとってもらえるだろうか？ もちろん、当の本人の方がはるかに緊張していたはずで、小学校時には、難聴児のクラスで学んでいて、全くの健常者との生活は、中学校がはじめての体験となったからです。

彼女をふくむ、この子どもたちとのであいにあたって、二枚のプリントを小わきにかかえて教室にはいりました。「出会いを大切に——自己を語る一年に——」とした教科通信でした。浅井さんは、耳からはいる情報から疎外されているわけですから、できるだけ、目からの情報を多くしてやりたいと考えたのです。いわば、耳の不自由な少女へのメッセージからはじまったわけですが、それ以後、七年間、ほとんど毎時間欠かすことなく発行しつづけて、気がつく通算八四〇号を数えるまでに、とは思っていませんでした。つづけていく中で、子どもたちや親の間に（さらには教職員の間にも）

「市民権」を得るようになるにつれやめられなくなった、というものが偽らざるところです。（八四〇号の内わけをいえば、『がりがあ』の馬の七八名の仲間たち』というタイトルで三年間。『T E T O T E T O 79』で三年間。それぞれ一年生から三年生へのもちあがり。『飛ぶ教室』の子どもたちだけ二年生の一年間のみ。）

二一 思春期の自我形成にくぐらせた三つの課題

ほくの勤務する私立平安女学院中学・高等学校は、同志社とは同じ烏丸沿線で、御所をはさんで、その南の方に位置します。一九九五年には、創立百二〇周年を迎える古い伝統をもつキリスト教主義の学園ですが、中学と高校とは教員体制もはっきり分離されているわけではなく、授業も中・高かけもちで受けもつ教員は少くありません。ほく自身、この十年近くは中学生の授業がけっこう多かったのですが、校務分掌上は高校に位置していました。

ところで、ほくはそれまで、何度か中学生を受け持った時の経験から、思春期の自我形成にくぐらせた三つの課題、というようになことを漠然と考えていました。

その一つは、親のくらし、生活をしっかりうけとめさせたい、ということです。つまり親がどんな仕事をし、どんなくらしを背負いながら子どもを育てているのか。親が生きてきた歴史の中で、子ども

もの現在と未来にどんな願いをもっているのか、その願いの根っこにあるものにふれさせたいということです。

二つ目は、身近な者の戦争体験の継承という課題です。次代をになう主権者として、平和の課題は欠かすわけにはいきません。平和を観念的な知識ではなく、たしかな「手ざわり」の中で考えさせるためには、身近な者の戦争体験が有効であることを、それまでの実践で教えられていました。遠い、自分とは全く無縁の昔話でしかなかった戦争が、実は「もし、あの時、父の耳もとをかすめた銃弾が、少しでもずれていたら、今の私という存在はなかったのだ」という発見は、子どもの戦争認識を一変させる力をもっているものなのです。ぼくが教師をはじめた二十年余の以前は、父母の戦争体験であったのですが、今は、戦争を知っている中学生の父母は皆無に近くなっています。したがって、多くは、祖父母の体験に頼らざるを得なくなっているのが実情で、年々体験をひきつぐこと自体、困難になっていますが、追求しつづけたい課題です。

三つ目は、性の課題。自分の身体や性の問題を人権の課題としてくぐり直させていくということです。性をメカニズムの問題ではなく、生き方の問題として、あるいは人が生きていく上での人と人をつなぐ関係「性」の課題として、いっしょに考えてみたいと思います。

こうした三つのテーマを三年間、単元の学習とかかわりをもたせつつ、何度もくり返して、形を変えながら書くことを通して考えさせたい。そして、それらが、個人の「閉じられた」営みではなく、あるいは、教師と結ばれる点と点のつながりだけでなく、同じ思春期を生きる仲間として、子どもたちひとりひとりをつなぐ、「広場」の役割を教科通信にもたすことはできないだろうかと考えたわけです。

この三つのテーマは、一度やればおしまい、というものでも、個別の無関係のものでもなく、相互にかかわりあい関連しあいながらひとつのものに収斂されていく、そんなイメージで展開したいものだと考えてみました。収斂されていくのは、「自分ががし」というテーマにむかって、というイメージです。

たとえば、くらしの現実、親のねがいとむきあわせたいという課題を中心に図式化してみれば、こんなふうにいえるでしょうか。一年時には「わが父が母を語る」という作文を課します。これはあくまで子どもの側からのアプローチにすぎません。親がどんな思いで子どもを育て、日々接しているか、ということはあまりでてくることはありません。思春期の入口に立つ子どもの目から見た、かなりシビア（なことの多い）父親像、母親像が描かれることになリます。

二年時には、「性の課題」の導入として、「私の I was born」という作文を課すことになるのですが、そこであらためて子どもたちは、親の願い、思いにまともにもふれることになります。「わが父わが母」は思春期の子どもの中から一方的な親に対する見方で書けるのですが、「私の I was born」では子どもが親に取材しないでは書けないしかけにしてあるのです。

三年には「戦争課題」とクロスオーバーするのですが「語りつぐ戦争体験」の課題で、聞き書きをさせることで、歴史的社会的なひろがりの中で、祖父母から父母へ、さらに現在へと、生命から生命へ、ねがいからねがいへと手わたされて現在を生きる自分というものに出あわせたいとねらいをおきながら、課題設定してきました。いいかえれば、歴史的存在としての自己認識の糸口となりうる通路を将来にむけてつけておきたいと考えたわけなのです。

三 何に留意しながらすすめてきたか

国語たよりのとりくみでくり返し、あきもせずやってきたことは簡単なことです。各単元のちよつとした読後感想を含め、年間十数回書かせるわけですが、その作文の中から、いいものを選んで、ほくのちよつとしたコメントとともに載せる。コメントは批判的な調子はさげる。よいところを感想的にほめる。紙上では絶対説教しな

い。

“いいもの”の安易な妥協はしないが、年に一回はすべての子どもが作品が載るように配慮してきました。どうしても書くことの得意な子と苦手な子はいるわけで、面白いかどうかの基準で選んでいきますと偏ってしまいます。それは避けたいと思いました。どこかで一回は自分が主人公の号を持ち帰ることができる、それを大切にしたいと考えたわけです。

ただし、いいものにこだわりたいという思いは、ずっと抱きつづけてきました。“いい”というのは作文の上手下手ということではありません。基準は、子どもたちが“ああ、先生は、自分の作文のこういうところを評価して載せてくれたんだな”と納得できるものでなくてはだめだ、という点だけです。“自分の作文はだめだけど、あまり載せないのはかわいそうだから、お情けで載せてくれたんだな”、と思わせるような載せ方だけはすべきでない、そうこだわってつづけてきたのです。

そのためにも、作文の書き方とか、表現の工夫とか、原稿用紙の使い方とか、そういうところからは入らないで、子どもとほととの信頼関係をたがやすことを何よりも大切にしてきました。どんなものでもすべて一度はうけ入れる。何を書いてもいいんだ、という安心感がないところでは感性の解放はないわけですから。

信頼関係という点でいえば、子どもの作品は、実名が原則ですし、子どもたちが書いてくる作文は、載ることが暗黙の前提としてあるわけですが、微妙な問題を含む作品については、事前に了解を求めたり、匿名の仮面をつけて載せるなどの配慮をしてきました。以前『飛ぶ教室』という雑誌の対談企画で、心理療法師の河合隼雄氏と対談した時（ちなみに、その時の対談を含む河合氏の対談集が『私の子どもたち』というタイトルで検書房から今秋出版されることになっていきます）子どもの作品をあたかも自分の所有物のように扱う教師の無神経を批判して、子どもの作文は、実は教師にあてた私信のようなものだから、それを「公開するということは何を意味するか」深く考えなければならぬといましめておられたことが、深く心に残っています。大切な要件であろうと思います。

また紙上では絶対説教しない、ということもかわるのですが、多くの側からの直接的なメッセージはできるだけ少なくして、伝えたいメッセージは作文のコメントに感想的に託すか、新聞記事のきりぬきの多用による代弁、という方法をとってきました。いわば直接話法ではなく、間接話法による伝達方法を採用したわけですが、思春期の子どもへの距離のとり方、という点からも有効な配慮であったように思っています。

新聞の切りぬきは継続して行っている重要な要素です。ニュース

性の強いものは当然ですが、目についたものをストックしておいて、その都度の単元課題や、先述した三つの課題にかかわる作文との関連で載せる、という方法を探っています。とくに戦争課題と性の問題、環境問題は、切り抜きなしではやることのできない課題です。切り抜きをはじめたのは、自分たちが生きている現代がどういう時代であるのか、その時代の息吹とでもいうもののできるだけふれさせたい、という思いからですが、子どもたちの予想外のうけとめられたにはげまされるようにしてつづけています。

さて、編集方針というか、留意点の最後にあまり本質的ではないが、案外大切なことだと思われることをひとつ、続けるための小さな工夫に属することがあります。それは、紙面に遊びの要素をもたせること。五分の一から四分の一度、イラストやら漫画やらのスペースとしてあてておく。新聞の切り抜きも、しんどいテーマのあいまに、ナンセンスな息抜きの要素の強いものをいれてやる。作文もいろんな種類のものをストックしておいて、一つのテーマのものが一定期間つかないように配慮する。重いテーマのあいまに「めっちゃ腹立ったこと」とか「私の失敗」とか「思いこみ・カン違い」とか肩のこらないものを入れこんで、紙面が一本調子にならないように工夫してきました。子どもの側にとっても、気分転換になつてよかったです。子どもも送り手であるこちらにとっても、

ある意味で決定的だったように思います。続けていけるためには、楽しみながら、遊びを入れながら、でないと息切れしてしまいますから。

こうして一枚（時に二―三枚）の国語たよりを持参して教室にはいるのですが、子どもたちのまなざしが、手もとに注がれるのを意識します（たまに手ぶらで行くと「なんや今日はなの？ 先生もサボリやな。国語で楽しみなのは『T E T O T E T O』だけやというのどうしてわかってくれへんの。」としつかりはげましてくれる子がいるので、なかなか忘れるわけにはいかないのです）。

配りはじめると、休み時間の気分をひきずって、なんとなくおちつかない教室の雰囲気、今日は誰のだろう、という点に関心がむいて、全体が集中するのが肌感じられます。一枚のたよりを読みおえる授業のはじめの五分間。それで授業にはいるのです。

もちろん時には脱線して、その内容にかかわる話して授業の大部分をついやす時もなくはありませんが、それもその単元の授業と関係することが多く、けっこう意味ある脱線だと思っています。

授業内容とその日に配る国語たよりととは必ずしもつながっていないこともあるのですが、全体としては、授業の流れと関連づけながらの編集になっています。たとえば、戦争教材の場合を例にとれば、そこにはいるすこし前から、新聞等の切り抜き等の連載で仕込みを

はじめ、予備学習にはいる。その単元学習の間、関連の内容で山をつくりながら、授業終了後も感想文や、あるいは戦争体験の聞き書き等の大きな課題にとりくむ時は、ひきつづき継続することになる。当然、次の単元準備と重ねながらの編集方針をとるわけですが、教材の補助プリントとしての使い方、位置づけ方は極力さけて、国語たよりの作品としての独立性を大切にしてきたように思うのです。

四 「私(S I was born)」を中心に

一九九一年六月、『T E T O T E T O』の子どもたちが二年の一学期。全国私学性教育研修会が、平安女学院を会場に開かれました。前年の秋、その準備がすすめられる中で、できるだけ多くの教科でも公開授業をして参加者にみてもらおう、については国語科では、おまえがやってみないか、というなりゆきになりました。

性教育については、大に関心もあり、中学生の生き方を考えさせる上で欠かすことのできない課題ではないか、と考えてはいましたが、性教育という名前からうける一種オドロドロしい感じについて足すくむ思いもあり即座におことわりしたのですが、言葉たくみに説得されて、こちらも勉強のつもりで、ずいぶん横着なひきうけ方をすることになりました。教材も今使っている教科書（教育出版の「中学国語」）の中の詩教材『生ましめんかな』（栗原貞子

作)をとりあげたらどうか、とのていねいなアドバイスもあり、全体の流れをくみだててみようと考えました。

公開授業をひきうけた時、どうせのことなら、その日だけでなく『生ましめんかな』を軸にして、一年間の授業の流れをくみだてられないだろうか、と考えてみました。二年生の教科書には、『あのころはフリードリヒがいた』とレイ・ブラッドベリ作の『霧笛』が収められています。以前の経験で、この二つの作品が子どもたちにとって受け入れられるか充分予測がつかましたので、この二作品を柱にして、『霧笛』でしめくくるといふ見通しはすぐに立ちました。しかし、それでは導入に何をもってくるか、といふことで考えこんでしまいました。

一年間の授業の流れ、という時何を思いついていたかといえ、年間を通して柱にすべきテーマを設定し、それぞれの単元がそのテーマに束ねられていくような授業展開ができないか、といふことだったのです。くくるべきテーマは「何のために自分はこの世に存在し、何のために生きるか」といふ問いかけ、いわば「自分探しの旅」を子どもたちといっしょに、授業を通じてできないか、といふ問題意識だったのです。

そこで、少し冒険かもしれないなと思いつながら、吉野弘の『was born』を使ってみることにしました。詩のよみとり、鑑賞は

もちろんのことですが、主たるねらいは、詩の感動体験をよび水として「私の『was born』」を書かせることにあったのです。

それまで高校一年生では何度かこの教材をとりあげたことがあったのですが、中学二年生のはじめにうけとめられるだろうか、という一抹の不安がありました。そこで学習のはじめに、子どもたちに次のようによびかけてはいることにしました。

「吉野弘の『was born』という詩を学びます。みんなにはすこし早いかな、という気がしなくてもありません。しかし、今の君たちの年代のどこかで、必ずつきあたる問題です。またどうしても中学生という年代で考えてほしい問題でもあります。

思春期という時期は、自分がどこから来て、どこへ行くかとしているのか」といふ人生における根本的な問いかけを感性の中にもっている時期です。吉野さんが詩で問いかけていることは解決できることではないかもしれませんが、あるいは人間にとつての永遠のテーマなのかもしれないのです。あなたはあなたの『was born』に一生をかけて答えをだしていくしかない、そういう種類の問いかけであるかもしれないからです。この詩の学習のしめくくりに、あなたの『was born』を書いてもらおうと思っています。しっかりとがんばって下さい。」

しかし、そうした不安は杞憂にすぎなかったことが、初発の感想

文をよんだ時、すぐにわかりました。子どもたちの反応はきわめて
すどく、衝撃的な思いでうけとめたようでした。「was born」
は今さら説明の必要のないほどによく知られた作品で、思春期の少
年の性と生に対する微妙なゆれと不可思議さを劇的な構成の中に描
いたものです。

次代に生命をつなぐためだけのようにして生まれ、生き、生命を
おえる蜉蝣。「僕」の母もまた蜉蝣だったのだ、という衝撃ととも
に認めなければならぬ事実。いや母のみならず「僕」も、おそら
く自分も、自分につながる人間もまた……。生きとし生けるものの
宿命のイメージとしての蜉蝣。

「was born」の感動は、読む者をこの地点までつれてきて「僕」
とともにおさざりにされるこわざだと思えます。わたしたちは、
「僕」とともに、あらためて「私は何者なのだ」の問の前に茫然と
たたずむしかないのです。ほくが、この詩との出会いを通じて子ど
もたちに期待したのは、まさにその一点をおいてありませんでした。
「根元的な問いかけの前に茫然とたたずむ」こと。結論からいえば、
子どもたちは期待以上のうけとめ方でこたえてくれました。

五 生きることの意味への問いかけを前に

そこで連休前の四月下旬、父母への協力依頼の手紙と子どもに對

自分さがしの授業づくり

する課題提示をしておきました。原稿用紙五枚以上、というのがこ
ちらの課した枚数だったのですが、ほとんどがそれ以上の力作ぞろ
いでした。生命の根づよさとうらはらのあやうさをとみにうけとめ
つつ、あらためて今生きていることの意味を考えようとするものが
ほとんどでした。

ことに自分の記憶にない乳幼児期に、生命にかかわる病气やけが、
事故を経験したことを親からきかせてもらったものや両親に同様の
経験がある生徒の作文に、その感を色濃くにじませたものが多かつ
たように思います。

たとえばT子は次のように書きはじめました。「今から十九年前、
兄が生まれました。その時母は腎臓を悪くした。それから数年後、
母はおなかに赤ちゃんができた。だけど、この子を生めば、自分も
あぶない」といわれ仕方なくあきらめた。それからまたおなかに赤
ちゃんができた。母は今度こそ、と思ひ産む決心をした。だけど母
の両親に「頼むからやめてくれ」と涙を流して頼まれ、しかたなく
この子もあきらめることになった。

そしてまた。今度は、私、だ。

私の時も先生から「もし産んだら、あんたが危ないで」と言われ
ていた。でも母は私を産む決心をしてくれた。実家の母にも私が生
まれる数週間前までしらせなかつた。

そして私が生まれた。

でも母はじん臓を前よりもさらに悪くしてしまつた。今では週三回、一日五時間、透析するために病院通いをしている。」

T子は「私は生まれてきたのではない。母の生命をもらったのだ」と言います。それはまさしく実感だつたらうと思ひます。

この作文を書いてほどなく、彼女の家族を不幸が見舞います。父親の死です。寝たきりの祖父をかかえ、生活の重荷が、母の肩にかかります。その母を支えながら、生活を支えるけなげな努力がT子にはじまります。そしてその二年後、母の死が……。

小柄で、ほほえみをたやさない彼女に、生活のつかれの影がおちる時があります。「がんばりや」と声をかけることしかできないのですが、そのたびに、けなげにはほほえみかえし、「だいじょうぶです」としか、いいません。そうすると、そうか、がんばらなくっちゃ、と疲れかけたオジさんはげまされるのです。

T子だけではありません。お風呂でおぼれて死にかけたというK子。ガソリンスタンドで車の下にもぐりこんで遊んでいて、危機一髪のところを母に助けられたというH子。臨月のお腹をかかえ、家族の乗る車が事故を起こし、腹をかばって額でフロントガラスをやぶりながら守りぬいてくれた母に、生命をもらったのだとの思ひをかみしめるY子。

子どもたちは「私の I was born」をまとめる中で蜉蝣や「母」や「僕」と自分を重ねながら、受け身で、自分の意志と全く無縁で生まれてくるしかなかった自分をあらためて確認するわけですが、この動かしがたい事実を前にして、ただ「茫然とたたずんでいる」だけではないのです。けなげな子どもたちの抵抗がはじまります。自分の生は偶然の所産でしかなかった。それは認めざるを得ない。ならば、今の自分、あるいはこれからの自分の人生もまたその偶然の流れの中にゆだねるしかないのか。それはどうもちがうのではないか。どこまで自覚的であるかどうかは別にして、ほとんどの子どもが、そういう問いかけを自らに発しながら、こたえを求めてもだえるのです。

子どもたちは自分の意志と無関係に、偶然にこの世に人として生をうけた。その偶然を必然ならしめる人生の意味について、誰の言葉でもない自分の言葉を捜そうとあがくのです。おそらく、そのあがきの中に、思春期を第二の誕生と比喩的によぶことの意味があると思うのです。受け身の生を能動的な生に転化していくための生みの苦しみ。子どもから大人への「通過儀礼」としての根元的な問いかけの深い意味が。

ある子はいいます。生まれるというのは、生まれてすぐ自分という自覚もない幼児までをいうのであって、自分というものを自覚す

るようになってからは、「生きていく」というふうになるのだ。ある子はまた「たしかに生命は選べない。それは自分の意志をこえている。しかし生き方は選べるんだとわかった」などと書くのです。十三や十四の子どもにこんなふうにかかれると、ほくとしては、ただいたずらに齢を重ねて四十数年間という思いにうちのめされて、おちこむしかないのです。

六 思春期——この劇的なるもの——

さて、指定の紙数も残り僅かとなりました。詳しい授業展開を紹介することはできません。(詳しくは拙著『わたしが「わたし」に出会うとき』—思春期の自我形成と授業づくり—) 文理閣発行、を参照していただければ幸いです) 図式的にデッサンすればその後の授業の流れは大よそ次のようでした。

出発点に『I was born』において、しめくりに『霧笛』をおき、その展開軸の中ほどに『生ましめんかな』と『あのころはフリードリヒがいた』という二つの戦争教材を据えるという一年間の流れです。『I was born』ひびく『私の I was born』では自分の生のルーツに目をむけさせてきました。『霧笛』もまた、(とりあげ方もよるのですが) 小暗い自我の奥深くにわけ入っていく気味の要素を濃厚にもった作品で、『I was born』に直接的につながる作品だ

自分さがしの授業づくり

といえるのですが、孤独に自我の闇深くわけ入る作業の間に戦争課題をさみこむことで、歴史的、社会的な視点をとりこませつつ、三年時の戦争体験のきき書き作業で両者を「生命の流れ」の歴史という観点でつなぎたいと考えてみたわけです。

性の課題を中心とした一年間の授業展開といいましたが、中二でもっぱら展開してきたのは、その前提ともなる土壌を耕やすことについてやして、直接的にとりあげるようになったのは三年にはいつてからでした。これも、新聞の切り抜きを中心にするつもりでしたが、十五歳の少女の新聞の投書「性交なぜ教えてくれないの」を皮切りに「避妊」、「性交」の是非をめぐる若者の意見、「中絶」、「買春ツアー」の問題、従軍慰安婦問題等々、子どもたちの反応をみながら、多面的なとりあげ方を工夫してみました。それを一学期はじめから二期半ばまで(一学期後半からは間隔をあけて) つづけていったのです。

その中で一学期のおわり、F子が書いてきた次の文章は象徴的なものとして感慨深かったです。

「エイズになるか万年処女かどっちがいい?」先日母と話していました。母は「万年処女」といいました。私も万年処女派です。三年生になってからテトテトにくつも性の問題が載っていました。私の心に残っているのは、赤ちゃんをおろす時のものでした。その

プリントが配られた日、私と母とでいろいろ話しあいました。「六週間目にはもう意識があるんやて」「お腹の奥まで逃げるんやてなあ。知らなかった」そして、はじめの「エイズか万年処女か」次の日はおばあちゃんもいれて三人で討論会。おばあちゃんの話によると、おばあちゃんも仕方なく子どもをおろしたことがあるそうです。

あのテトテトをもらって、本当にいろいろ考えさせられました。もし私に赤ちゃんができたらどうしよう、とか、結婚するまで絶対肉関係をもたないぞ、とか、もし赤ちゃんができて殺さないぞ、とか、その他もつとつと考えました。

中学一年生の時、私は性にもものすごく興味をもち、早く経験してみたいなあ、と今から思えば顔が真っ赤になるようなことを思っていました。でもいろんな知識がはいってくるにつれて、一時の愛で許すなんて、男の人に軽くみられるし、それに後悔するかもしれない、その人と結婚すると決まった人でもないのに、本当に結婚する人が知ったらどんなに傷つくだろうとか、もしエイズにかかってたらいやだし、絶対に軽くは許せない、と思うようになりました。

性は興味本位ではないと思います。だって昔から子孫繁栄のために行われてきたことだからです。それを出来心でとか、経験してみたからとかでしては絶対いけないと思います。だから私は、結婚するまで絶対に処女でいようと思います。自分自身

を傷つけないためにもそうしようと思います。そうしたら、この世で一番素敵な初体験が、一番好きな婚約者でできると思います。」

『TEOTETO』にのせる作文のタイトルは子どもがつけてこないかぎり、ぼくの方でつけるのですが、F子の場合は、最後の箇所からとって「一番素敵な初体験のために」としました。匿名の仮面はつけてやりましたが、こんなふうに「性」というものを何のてらいもなく、まぶしくらいにまっすぐにうけとめて表現する率直さに、ほほえましいどころでなく圧倒される思いがあったのです。またF子に関しては、特別な感慨もありました。一年前のちょうどこの時期に、この子がどんなことを書いていたのかを考えて、

「あのF子がね」の思いを禁じえなかったのです。

毎年六月上旬、中学生は宿泊学習会に行きます。子どもには、学習会の作文を、というも芸のない話しでしたから、事前に『伊勢物語』の中の「筒井筒」を投げこみ学習をして、みんなもひとつ「歌物語」をつくってみよう。学習会で印象的なできごとや体験を短歌（三首以上）にしてその解説やできごとを地の文につないで書くこと、という課題を与えておいたのです。

二年生は丹後半島にある学院のセミナーハウスで、二泊三日の日程で行いました。一応「消灯は十時」といつてありますが、ま、そこは我々もおおよびにかまえていたのですが、まさか夜半にこんな

ことをしているよとは夢にも思わなかったのです。

「もともと真夜中すぎに大移動みんなでもやろう野球けん」夜中に見張りをたててパンツ一枚までという条件で野球けんをやった大いにもりあがったということです。そのうちの一人がF子でした。

『TETOTFTO』に載せることを前提とした作文に書いてくる方も書いてくる方ですが、載せる方もまた、といえるかもしれません。

F子は「性にすぐ興味をもち、早く経験してみたいなあ、と今思うと顔が真っ赤になるようなことを思っていました。」といいまです。思っていただけでなく、口に出して言うので不意をうたれてこちらはあわてるのです。F子だけでなくクラスの中に何人か特別に性への関心の強い子がいて、クラス全体に独特な雰囲気をつくっていました。時期にすれば二年生の一学期半ばすぎの一ヶ月くらいがピークでした。「歌物語」の野球けん事件の頃がそれでした。

ところがおもしろいことに、ある時期がすぎるとまるでつきものがおちるように沈静化していくのです。それは一種不可思議な現象でした。三年生になって、「性」関連の課題を集中して連載しはじめた頃には、むしろ、一種おごやかな雰囲気すらある中でうけとめられるようになり、それもまた予想外のことでした。

そのことをぼくはうまく説明できません。ただF子に即していえば、こんなふうにいえるかもしれないと考えています。『I was

born』「私のI was born」からはじまった自分の生のルーツをさぐ

っていく。『自分がしの旅』は間に『生ましめんかな』や『フリードリヒ』をはさみながら、『霧笛』に行きあたる。その中で、自分の生が、自分の意志と無縁に、偶然にもたらされたものでしかかったという発見を通じ、受け身の生から主体的に生きなおす、第二の誕生にむけてのあがきをこころみはじめ、ちょうどその時期に、「性交」や「中絶」等の問題を「自分がし」のプロセスにくぐらせることで、それまでは、生まれる側の延長線上・子どもの側にもつばら軸足をおいて考えてきた自分というものを、今度は自分も母親になりうる女性性をもつ存在なんだというふうに意識の上で軸足を一八〇度移していく転換点のようなものがあつたのではないかと。そういうドラスティックな成長の姿をよみとるべきではないかと思うのです。

そしてそれはF子のみではなく大多数の子どもに共有の体験だったように作文をよんでいても、そう思えるのです。ああ教師をしていてよかったと心から思えるのが、こういう時です。子どもが仲間とともに揺れ、葛藤し、悩み、傷つけあい、生みの苦しみを苦しみつつ、自らを生ましめていく、そのドラマにたちあえる喜びが、この仕事を支えているし、ある意味で、それがすべてだと思うのです。

一番素敵な
初体験のために

こみ

「エイズになるか、万手処女かどっち
かい？」先月、母と話してました。
母は、「万手処女」といいます。私も不
手処女派です。

三年生になつてから、テトテトにいく
つと性的問題へのそりまわりました。私の心に
残っているのは赤ちゃんとあつた時のそ
のイメージ。

そのプリントを配られた日、私と母
で色々話してました。「十個質問は
は、もう先生さんある人知ってるし、お腹の
奥まで進んでる人知ってるなあ。知らん人か」

た。「怖いなあ、しやーてはじめての「エイズか
処女」。次の日は、おばあちゃんも入れて三人で
討論会。おばあちゃんの話はよすこと、おばあち
ゃんも仕方なく子どもとあつて、「そ、こかあつて
うです。

あのプリントをもらって、本当にいろいろ考え
せられました。もし、私に赤ちゃんができたらど
うしよう、とか、結婚するまで、絶対対肉、体関
係ともしないわ、とか、もし赤ちゃんができて
も殺さないで、とか、その他にも、いろいろも
考えました。



りやいであるのだ。この長い説教をきいていると、いらいらして、どうしようもなくなぬ。私は「まあ、心がつく、こ人は家帰ったら人ごとか思っている。帰るころには忘れて帰っているや。」

こういうこともあった。夏休中、暑くてあまりこは人かはいらうず、むむかるとのでこは人食べてる様でねていたう、おかあさん「一時間でもへやでねて」と言った。たーかにやうだと思っただけで、そのまよねていた。やーたうお母さんかまたかっぶつぷりほじめたので、お屋にぬに行こ、と思つてまうた。やーたらねむやんさめたので、やあままこは人をたへてれどとみでゆつくりしていた。やーたうまはまたお母さんが、「あんたさ、このころ私の言うことかへんやけどどういっつのもりなや。さっきあんたのこと思つてねていであつてまうたやだのに、そのままこは人たへて、てれどゆつくり外して、あてやうとてうてうてな人。もつこいっほいあんたにまうことおんややで、このころいやんやうにうてなや。」



このころよくにうるまなほそいものだ。と思つてあかついてきたので立ちあがりうてたう、あんたは、話の途中で立ちうて人ちやう失礼なことしてらぬや、ちやんと話してときく時は目とみせうまきやさい。」

「うん、ゆりて廊下に立ちうてたやけど、お母さんど、おかつくんとおたらう、ほつといてくぬたら、いのに……私のお父さんは、自分か自分あつときとかか私かおまのよみやいと、すぐ自分の昔の話をする。おまは母朝早く起きてお前のやうてや使物やうしてたりてんや、うてまう。」



